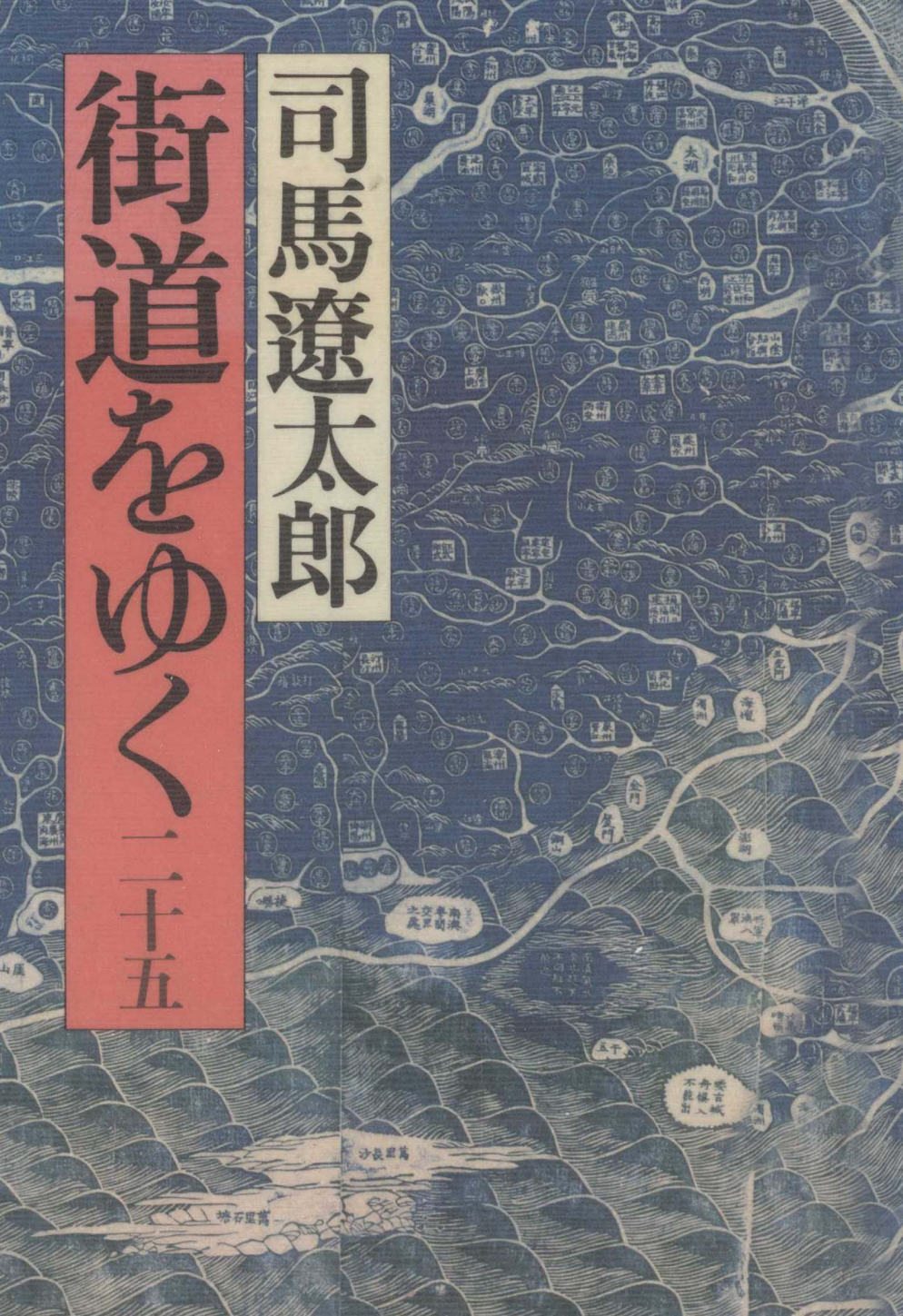
司馬遼太郎

街道をゆく

二十五



街道をゆく

一十五

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和六十年　五　月三十日　第一刷発行

街道をゆく　二十五

定価　一〇〇〇円

著者　司馬遼太郎

発行者　川口信行

印刷所　凸版印刷株式会社

発行所　朝日新聞社

〒104　東京都中央区築地　五―三―二
電話　〇三―五四五―〇一三一（代表）
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎　一九八五年

ISBN4 - 02 - 254965 - 3
Printed in Japan

街道をゆく　二十五

本書には「週刊朝日」昭和五十九年八月十日号・連載第六百四十五回から十二月二十八日号・連載第六百六十五回分までを収録。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

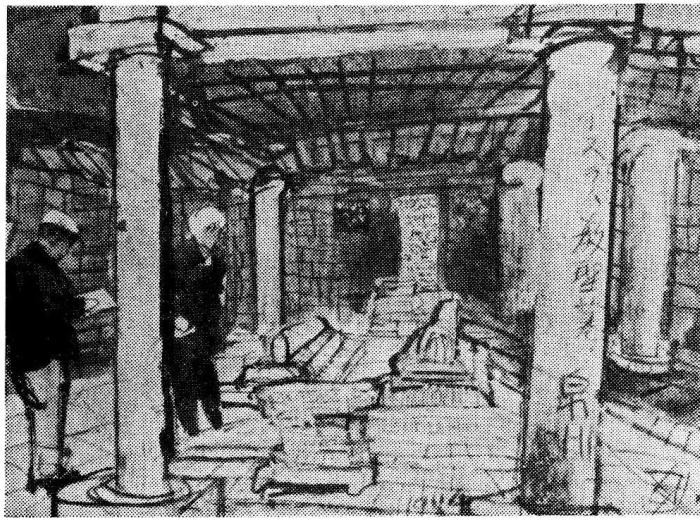
閩(びん)のみち
文明交流の詩情 7
倶楽部 23
山を刻む梯田 39
福州の橋 53
独木舟 69

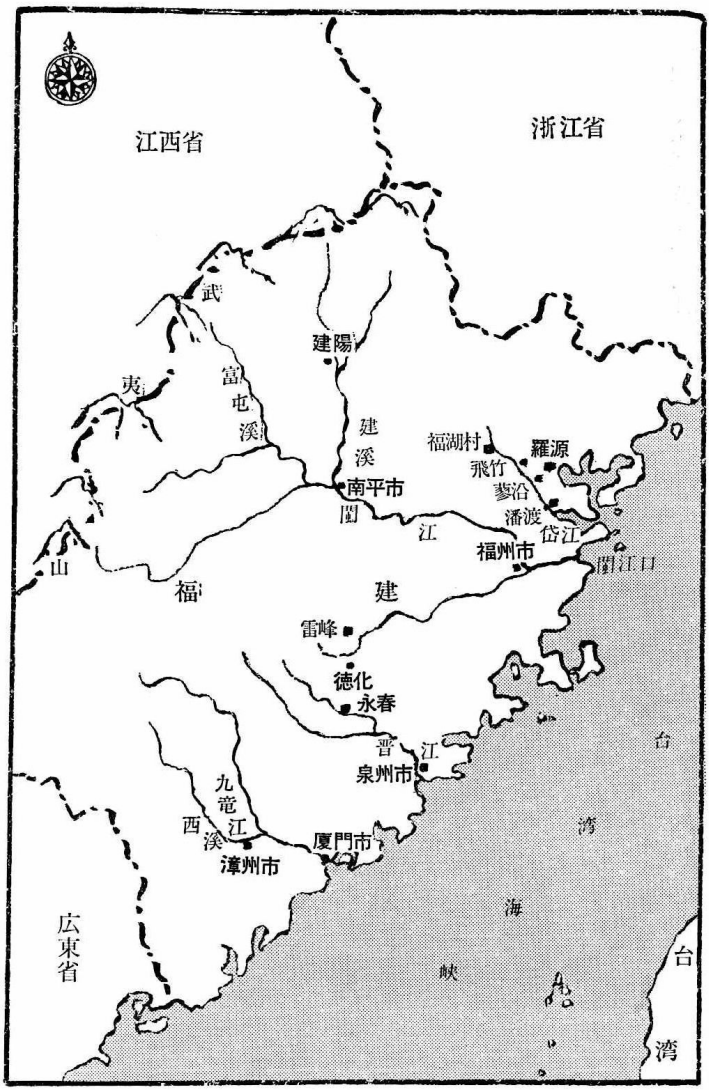
山から山へ　83
焼畑族　101
対々の山歌　117
雷峰を過ぐ　133
餅から鉄へ　149
天目茶碗　165
土匪と械闘　183
華僑の野と町　199
異教徒たち　213
『西遊記』ばなし　227

陶磁片とコンパス　241
泉州の出土船　255
イカリの話　269
七百年前の山中さん　285
夢のアモイ　299
厦門両天　313

題字＝棟方志功
え　＝須田剋太
装幀＝原　弘
地図＝熊谷博人

文明交流の詩情





此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

福建省というのは、中国でもいわば田舎のような省である。ながく、「閩」という地域名でよばれてきた。閩というコトバの意味はわからないが、華北や華中の先進地帯からみればどこか草深くて異風なイメージを帯びていた。孔子（紀元前五五一～四七九）の時代には、中華のなかに入っておらず、後漢のときにできた辞書の『説文解字』にも、閩とは「東南越」とあって、いわゆる百越のあつかいになっている。おそらく、揚子江からインドネシア半島にまでおよぶ「インドシナ諸族」の一派の住むところだったのであろう。

おそらく三世紀以後、しだいに漢人が入植して〝内地化〟がすすんで行った土地かとおもわれる。歴史的には中華の心臓にはあたらなかったが、福建の特徴はゆたかな稲作と、良港に富む海岸線にあり、いわば右脚を水田にひたし、左脚を海にひたしているような土地であった。このため唐・宋以後は、西方の文明に洗われる地になった。

福建のことは、しばらく措く。

東西文明の交流について考えたい。

以下の場合の「西」とは、西アジアからヨーロッパにかけての文明をさす。六、七世紀において「東」を代表したのはいうまでもなく大唐長安の文化である。東と西とは主として絹を仲介物として相交わった。その仲介者は、西域諸国（タクラマカン沙漠周辺のオアシス国家群）だっ

た。

舞台も、よかった。背景には、流沙がひろがっている。オアシスには葡萄畑があり、はるかにうごいてゆくものとして、駱駝(らくだ)があった。

西からくる者は目や髪の色が異っていた。かれらとの交流は長安の詩人たちの詩想を刺激した。『唐詩選』は、一面では東西交流時代の異国情緒(エキゾティシズム)の所産ともいえる。

「日本人というのは、変だなあ。なぜシルクロードが好きなんですか」

と、中国人からきかれたことがある。私がはじめて『漢書(かんじょ)』以来、「西域」とよばれてきた中国新疆ウイグル自治区に行ったのは、一九七二年だった。そのときも、同行した若い中国側のひとから右の趣旨の質問をうけた。私は相手を満足させるような返事ができず、逆に反問してみた。

「中国人にとって、どういうイメージがありますか」

「単に田舎です」

と、そのひとはいった。げんに、北京の同僚たちが、「新疆(シンチャン)へゆくの？　たいへんだなあ」と慰めてくれたという。そのときの同行者は、中島健蔵氏を最長老に、井上靖氏、宮川寅雄氏、東山魁夷氏、團伊玖磨氏という顔ぶれで、それぞれ西域について鮮烈なイメージをもっている

ひとびとだった。若い中国側の同行者にとって、日本人のそういう詩的好奇心がふしぎだったにちがいない。

その後、NHKが西域を現地に取材し、「シルクロード」という番組を放映して高い視聴率をえた。この番組は、中国側との共同制作だったから、当然ながら中国においても放映された。中国側は、

「絲綢之路（スーチョウ・ツルー）」

というタイトルをつけた。絲綢之路というのは、このときはじめて造語されたのではないか。

日本では、古代中国の西域のことを、とくに、

「シルクロード」

とよぶ。そのことばを万人が知っているというのも、日本人の特異なロマンティシズムの一つかとおもえる。

よく知られているように、このことばは、十九世紀に中国を地理調査したドイツの地理学者リヒトホーフェン（一八三三～一九〇五）が造語し、その著書のなかでつかったことばである。

おもしろいのは、ドイツの一学者が造語したコトバに日本だけが過敏に反応し、日本式英語として流布されたことである。むろん、日本の国語辞典にはのっている。

イギリスやアメリカでつくられた辞書には載っていないのではないか。つまり、英語としては市民権をもつコトバではないようにおもえる。

〝シルクロード〟の時代、むろん英語は地球上の小さな部分で使われていることばにすぎなかった。「絹の道」といえば事足りるその歴史的概念を、わざわざ英国のコトバでいう必要もないのだが、そういう言い方が国語として定着するあたりにも、日本人の好みがひそんでいるといえなくない。繰りかえすようだが、私どもには東西文明の交渉史を詩的に感ずる気分がつよい。その「気分」に適合させるためにも、名前は外国語であるほうがいいということであるらしい。

その「気分」について、もうすこし考えてみたい。

奈良朝・平安初期（七世紀から九世紀）までの日本が、遣唐使を派遣して唐文明を摂取しつづけたことは、よく知られている。

遣唐使という国家的事業が廃止されたのは九世紀末である。以後、日本は文化的には鎖国のかたちになった。同時に、世界でも独自な文化である平安文化が醸成された。その一方において、唐の記憶は、文化として強烈にのこった。

さらにべつな言い方をすると、本場の中国では、唐以後も（当然のことだが）歴史がつづく。

政治・社会の変化が爆発するようにして連続し、遠い盛唐の文化の記憶などうすらいで行ったが、海東の日本にあっては唐の記憶は、氷詰めにされてのこった。唐がほろんでも、日本人は中国のことを、

「唐」

とよび、人のことを唐人とよんだ。詩は、唐詩を基本とし、平安期いっぱい、教養人たちは倦きることなく唐詩を読みつづけた。中国人はその後変化したことを考えの主軸に置くと、むしろ中国人より日本人のほうが唐の文化的な子孫であるといえる。小項目でいえば、唐詩の西域への異国趣味は、日本に残ったのである。

いまひとつは、十九世紀末（日本での明治末年）、中央アジア探険の英雄時代が興ったことも、日本人の東西交渉史についての熱をかきたてた。スエーデン人ヘディン、英国人スタイン、ロシア人ブルジェワルスキー、日本の大谷探険隊などが相前後して中央アジアの沙漠に入り、沙にうずもれた人類の遺産を掘りだした。

それとともに、中央アジア学が欧州（とくにフランス）におこり、日本の東洋史学界もはげしく刺激され、伝統的に日本になじみ深かった漢文の文明圏から、非文明圏に関心が移った。大正期から、すぐれた文献学者たちが、みずからそこへゆくことなく多くの業績を発表したことは、二十世紀初頭から中期にかけての偉観だったといえる。

そういう潮流と時を同じくして（明治末年から大正期にかけて）詩壇に南蛮趣味が興った。日本の戦国時代に、ポルトガル人やイスパニア人がきていたという過去の事実が、廃村の教会のステンド・グラスから射しこむ光のように、北原白秋や木下杢太郎たちを刺激したのである。このことは「島原・天草の諸道」（第十七巻）でもふれた。文明の東西交流に劇的なものを感ずる日本的伝統が、白秋や杢太郎の場合、南蛮への憧憬になってあらわれたといっていい。

ユーラシア大陸の西には、コーカサス型の顔をもつ人種がいて、ギリシア・ローマという文明をつくった。一方、大陸の東には、中国人をふくめたモンゴロイドの顔をもつ者が、中国文明を成立させ、持続させた。遠い世――以下は童話的想像だが――このふたつの顔が、沙漠のどこかではじめて出くわしたとき、

――お前は、たしかにヒトか。

と、おどろいたにちがいない。さらには、両者たがいにほめるに足る文化を身につけていることを知ったとき、驚きが尊敬にかわったかとおもわれる。

ただ、六、七世紀の唐の場合、その文明は西方にくらべて丈高く、きめもこまやかであり、総体にすぐれてもいた。このため、西方のほうが絹その他（紙という重要なものもふくまれている）を持ちだすばかりで、東方の側はやや西方文明について鈍感だった。それでも、楽器など

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com